

中国博物館めぐり

— 陶芸史雑話 —

中国陶磁器を永らく研究し続けて来たが、その研究は今まで、主に文献に頼らざるを得ないものであった。しかし、近年訪中する機会に度々めぐまれ各地を訪れる事が出来た。それらは、上海・北京を中心に、江西省の景德鎮・湖南省の長沙・山西省・河北省・河南省・陝西省・甘肅省・浙江省・広東省・福建省の各地におよんでいる。そして、これら各地の研究者と直かに接することにより、友人関係も出来、大いに研究の糧になっている。

中国はこの四十年来、近代化が進み、各地で開発・発掘が行なわれて来た。それにともない最近中国陶磁に関して、かなりの問題点があることがわかって来た。この小文では各地の発掘による成果と共に、これらの問題点を具体的に触れてみたいと思う。それは現在日本では知らされていないが、中国では重要な問題点であったり、日本で周知のことでありながら、再考が必要である問題点についてである。これらは中国の専門家に接して話し合い、それによって得られる新しく、且つ興味ある問題でもある。それらは、事実、次から次へと矢継早に出てきている。

例えば、中国の陶芸史は解放後のすばらしい考古学的な成果によ

藤岡了一

って資料の充実が各地で見られ、中国の専門家の間でもこれは大変困難な事業ではあるが、その成果を一応まとめる必要があるというところで『中国陶磁史』一冊を数年前に出版した。これは我々にとって非常に有難い教科書が出来たと喜ることので活用したものだが、実はこの本が出来上った時点で、もうすでに改訂しなければならぬ箇所が出て来た。これが中国陶磁史界の現状なのである。次から次へと新発見の遺物が出土し、考古学・陶磁学全般からみると質量とも大変な資料が報告されている。

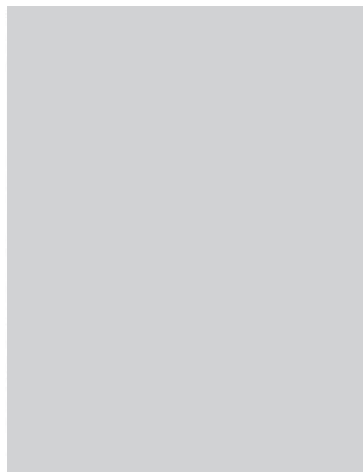
最近の二三の例をあげると、浙江省の省都杭州、ここは南宋の都臨安であり、以前から南宋時代の官窯が設けられていたことが知られていた。しかし、文化大革命の頃から、大きな工場などの建設で荒廃が憂慮されていたのであるが、今度新たに完全な官窯々址が発見され、この窯跡をそのまま博物館にしようとする動きがある。これは南宋官窯の一端を研究するに充分な遺跡であるという。いずれ開放されて、我々にも眼のあたりに見ることが出来るであろう。

陝西省西安（昔の長安）の北方に北宋時代独得の作調を示す魅力ある青磁を焼いた耀州窯がある。この窯跡の発掘も最近大々的に進み、

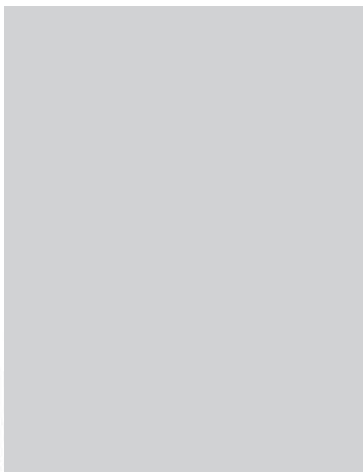
我々の想像を超える大規模な窯であることがわかった。窯跡・工房や窯道具などの破片も多量なものが出土しているのである。また、この発掘での大きな収穫は、青磁の窯として有名なこの耀州窯址の中で、唐代の唐三彩の窯跡が三ヶ所発見されたことである。これらはまさしく長安の都の貴族がここに明器類を焼く窯を別に造らせたものであると推測出来る。さらに、この耀州窯では五代時代の青磁の底に「官」の文字が書かれたものがあり、五代時代にすでに官窯であったことがわかった。これも大変な新発見である。と、同時に宋金元時代には白地に黒い文様をつけた磁州窯系の作品の破片が出土している。また、磁州窯系のものになるようなものが、唐代の窯跡からも出土している。大変興味深い事である。また、さらに言えば、この窯跡では古い唐時代から五代・宋・金・元の間各時代の作品の変遷、各系統の相互関係が発掘の層によって知り得ることである。ただ、この官窯々址が我々に開放される日がいつになるかということであろう。

また私は昨年六月、広東省から福建省を廻った。福建省では越州窯系の窯跡が発掘されている。ここからは唐の越州窯、あるいは唐代の古墳から出土した遺品と同類のものが発見され、これらは一括して、福建省の省都、福州の博物館に陳列されている。これを見ると唐代とは思えない古い様式をもつ作品がある。唐以前の南北朝、すくなくとも隋までと思われるような青磁の破片が沢山出土しているのである。このうちの一点の壺を見て思いをはせるものがあつた(挿図1)。かつて私が帝室博物館に在職中、陶磁の倉庫の片隅でみつけた壺、これは法隆寺献納御物のうち丁子香を納めた壺で「法隆寺資財帳」にも記載されているもので、世界最古の中国陶磁の伝世品

とされるものである(挿図2)。この壺について私は小文を書いたことがある(「陶磁」第12-1号)。ところで研究者仲間は唐より古いものかと言ひ、私もそうだと思つて来た。しかし、この度福建省の窯跡のものをみると、やはりこれは唐代のものであるように思われる。法隆寺の壺が、福建省の窯で焼かれたかどうかは疑問にしろ、このような古い形式のものが唐代にも造られていて、地方の窯にもその流れが及んでいたということが推察される。



挿図1 青磁双耳壺 唐福建省博物館蔵

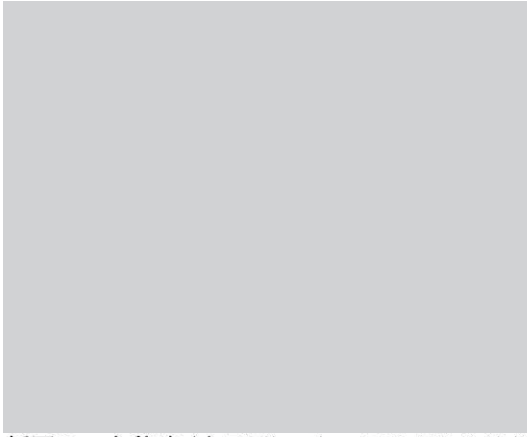


挿図2 重文 青磁四耳壺 唐(法隆寺献納宝物) 東京国立博物館蔵

またこの時福州から泉州・厦門へと車で直行したことが思い出される。泉州から厦門に行く途中には、「珠光青磁」を焼いた窯として有名な同安窯址がある。宋代地方窯の一つであるが、この窯は当時中国の貿易陶磁器の重要な窯であつたといわれ、膨大な量が東南アジアに輸出されている。これは、このような窯が同安だけではなく、処々に同安系統の窯があつたと推考させるものである。そして、ただ貿易用のみではなく、日常雑器とし

ても沢山焼かれたにちがいない。またこれらは浙江省でも焼かれており、杭州の博物館に行った時も、この専門家は浙江省で造られた「珠光青磁」は一段と作調が優れており、多分これらは、はじめ浙江省で造られ、それが地方に伝播していったものと考えているという。博物館で特別にそれらの実物を見せてもらったが、「珠光青磁」も簡単に考えてはいけなと思った。

我が国でやかましく言われる天目茶碗は主として建窯で造られたといわれている。その窯跡が改めて発掘され、その遺物は福州の博物館に澤山保管されている。その収蔵の陶片を直接見せてもらったのであるが、その中の一個に白い天目茶碗がある(挿図3)。そして、それについて意見を求められて、たじろいだ。淡い黄褐色風ではあるが、白天目と呼ぶ以外なものでもない。窯変で鉄釉がこのように白っぽくなるということがあるのかどうか、技術的にもなかなかむずかしい問題であるが、中国の研究者はこれは意識的に白天目に



挿図3 白釉碗(白天目) 宋 福建省博物館蔵

しているという。しかし、白天目と呼ばれるものはこの一個以外に出土していない。ただ、建窯の窯跡というものは杉大な規模で、大きな谷を陶片で埋めつくしているというものであり、日本の窯跡とは全く異なる大規模なものである。また発掘も、地上から掘るというものではなく、古くから

坑道のようなものを何本も掘り、その中から現在でも使用にたえ得るものを抜き出すというやり方である。余談になるが数年前大規模な盗掘団が窯跡に入りこみ、これが見つかったて銃殺されたと聞か、この時の盗掘品が香港に流れ、そこから日本にも入って来ている。それらの遺品も含めて、白天目はここではまだ発見されたとは聞かない。また、天目茶碗は建窯だけで造られたかという点、そうではなく、「珠光青磁」と同様に各地で造られている。もつとも素地・釉・形などは多少異なっている。現在、福建省では徳化窯が非常に注目されていて、この窯は青白磁や白磁の窯として有名なのであるが、その内の一つの窯で天目が焼かれている。やはり建蓋風のもので雑な鉄釉がかかったものである。白磁を焼く窯群の中で天目茶碗を造っている。この辺に白天目との関りがあるのかも知れない。また、極く最近の情報によれば曜変天目の窯跡が四川省重慶で発掘されたという(「月刊文化財情報」)。これは大変なことで、すぐにでもみたい衝動にかられる。

また、福建省での私の興味の一つに、江戸時代、インドネシアや我が国へ沢山もたらされた「呉須赤絵」・「呉須手」の問題があった。実はこれらがどの辺で造られたものが前から問題になっていった。誰がということなく福建省の南部海岸地域であろうといわれている。それを確認したいと思ったのである。福建省には福州の博物館に専門家、厦門大学にも著明な研究者がいるので、この人達にそれを聞こうと思った。しかし、その答えは意外にも、ここでは一切これらは焼かれた形跡はないというのである。これら呉須手と呼ばれるものはヨーロッパでは「スワトウウェア」と呼ばれており、汕頭周辺で焼かれたもの、日本で有田で焼かれたものが伊万里焼と呼

ばれるように、スワトー焼といわれている。汕頭は、福建省の省境近くの広東省の海港である。この奥に実は潮州窯がある。そのうちの筆架山窯はすでに北宋時代に白磁を焼いていた窯である。潮州窯ではその後いろいろなものが焼かれた形跡がある。なぜスワトーウエアといわれたかという、それは潮州窯で焼かれたからということになる。しかし、中国側では潮州窯でも、これらは焼かれていないという。私はこまっつてしまったのであるが、中国というのは実におおらかな国で、これらは何処で焼かれたかわからない。現時点では福建省でも広東省でもないのだから、これらの窯跡からは呉須赤絵の遺品は片も見つかっていないのだからという。中国には呉須赤絵の遺品は全々残っていないといってもよい。私は中国貿易陶磁器の有名な研究者である葉文程先生に呉須赤絵の図録を一冊進呈しては来たが、今や呉須手というものは幻の陶磁器となったのである。しかし、このことを上海のある研究者に話すと、潮州という所は大変なところで、窯跡が九十九もあるという。九十九とは非常に澤山という意味であり、またこれらは発掘調査がほとんど出来ていないのだという。そのほとんどが市街地で発掘は不可能であり、今後、これらを発掘すれば、どんな物が出るか見当がつかないとも聞かされた。

また、上海の博物館はもと大きな銀行だった建物を接収して、内部改装して博物館にしたものである。ここには浙江財閥と呼ばれる経済的に非常に豊かな人々が寄贈した蔵品が多いが、近年は中国全土から発掘された出土品が加えられ充実した内容になっている。陶磁器の主任として汪慶正先生がおられる。先生とは度々の訪問で、随分親しくしていただき、貴重な蔵品も見せてもらった。

この博物館の陶磁器の陳列ケースの最初に中国で最古の土器の破片がならべられている。十年ほど前になるか、江西省万年県・仙人洞から出土した土器片で、炭素14の検査によると一万年をはるかに越えるデータが出た。これは世界で最も古い土器ということになる。それまで日本の縄文土器が最も古いといわれていたのが、それ以上に古い土器が出たというので、日本の考古学界では大変驚き、中国でいよいよそういうものが出土したかと感嘆したものである。それが上海の博物館に陳列されている。しかし、最近これを見ると題箋に「約八千八百年前のもの」と書かれている。これはどういう事かと汪先生に質問すると、最近の考古学では「炭素14」の数値は発掘地の環境、その周辺の事情によりいろいろ左右されることがわかった。仙人洞周辺の土質は大変石灰質が多い。となると再考する必要があるということ、再研究の結果、このように修正された。修正されるとすぐに題箋でもそれを表わすというのが現在の中国博物館のやりかたであるらしい。

上海博物館では汪先生に倉の中のいろいろなものを出して見せてもらったが、その内の一つに小さな箱形の唐三彩があった。日本でも同類は澤山見られるし、奈良の大安寺址からは同類の陶片が一括多量に発掘されている。一般に陶枕の明器と見なされているが、これらは箱形のすべての面に意匠がなされており、枕の明器とすれば底には意匠はないはずである。また、唐三彩は明器ばかりであるというけれども、実際には使用した形跡のあるものも出土しているし、事実、上海の博物館には大きな唐三彩の皿で、いかにも長く使った痕が認められるものもある。とするとこの箱形の小さなものも実用品であったのではないかということになる。この意見は日本にもあ

って、腕枕(書を揮毫する時に腕をのせる枕)ではないか、大安寺出土の数十個分のこれらは寺僧の写経時に使用されたものではないかとの推論もある。しかし、実際書をやる人々は「この形ではとても無理です」という。腕枕というものは文房具として別の形のものがある。王先生の意見では、これは脈枕だろうという。病人、老人を診察する時、漢方医は長く脈をとるが、その時病人の腕をのせる枕である。私もこれは面白い推測だと思つた。西洋医学は腕をつかんで短時間脈拍をみるだけだが、漢方医は腕を両手でつかんで長時間みる。それによつて病質を診察するのである。この長時間の診察にはこの脈枕が必要なのである。いかにも中国的な遺品といえる。ただ、私は大安寺出土の唐三彩枕はわが国でこのような脈枕を用途としたものではないと思つている。これは大安寺の建築装飾材料、例えば垂木先の装飾瓦の参考資料(見本)であると推測しているのである。当時の設計施行に尽力した道慈律師が唐から持ち帰つたこれらは、そうした装飾瓦のサンプルではないかと考えている。作調の違つた三彩がいろいろ出土されるからである。

上海と北京の故宮博物院・歴史博物館にはたびたび行つており、その度に専門家に遠慮なくいろいろな質問が出来るほど親しくなつている。また、一昨年には大阪の東洋陶磁美術館で上海博物館蔵の古陶磁特別展が開かれ、汪先生が来日している。先生とは大阪で會い、その時、ぜひ正倉院展をご覧になるよう進言したのだが、その後大変感激した由を仄聞している。また北京の故宮博物院の馮先銘先生は陶磁史では国際的な權威であるが、汪先生とは親友であり、汪先生からこの話を聞き、昨秋後輩の李輝柄氏と共に来日して正倉院展を觀、やはり大きな驚きと感激をもつたという。中国の学者は

文献上では正倉院の名声を知っているが、眼の前にこれらを見ることは、ほとんどなかったのである。極く限られた人々がこれを見、特にこのような専門家はショックを受けるらしい。

北京では故宮博物院、歴史博物館、首都博物館(北京市立)を見るという。首都博物館は意外に知らない人が多いようである。北京の古い町並の環境を残した地域に有名な孔子廟があり、これを内部改装して博物館にしており、内容も充実して来ている。北京城外で発見された元代の染付や釉裏紅は絶品である。故宮博物院の陶磁館は紫禁城内の小さな建物を廊下でつないだ広大なものだが、行く度にその陳列品の一部が新発見のものに陳列替されている。上海博物館、歴史博物館でもそうだが、大規模な博物館では一度に陳列替をするのではなく、新しく入手した重要な新資料で既に調査研究の終つたもの、あるいは研究途中のものでも要すれば陳列する方針らしい。陶磁館で最近興味をもつたものに「法花」(Fahua)がある。法花というのは元来山西省の焼物である。山西省は不思議な所で古来彩瓦(彩釉をかけた瓦)をふんだんに使っている。寺院道觀等大規模な建築の装飾に用いているのである。これは山西の琉璃と呼ばれている。法花を焼いた窯はこのような低火度で色釉をつくる琉璃の窯から明代の初期に派生したものであると考えられている。瓦やタイルではなく器物をつくる窯があちこちに出来たと推察されるのである。しかし、まだ法花を焼いた窯は発見されていない。私が山西省を訪れた時も法花のみるべきものは案外に少なかった。故宮博物院の陶磁館の法花二点は稀にみる珍らしいもので、胴部のふくらんだ壺の器面全体に白・紫・淡青の色釉による細い縞模様を大きく捻じにして彫り込んでいる。回教徒好みの濃いデザインであつて、古くから回

教徒が多く居住する山西省にこのような作例が遺っている事実がよく理解される。京都国立博物館にも豎縞文の法花茶碗があり、それのもとになるような作品であった。故宮には他にも景德鎮で焼かれた法花も列べられている。

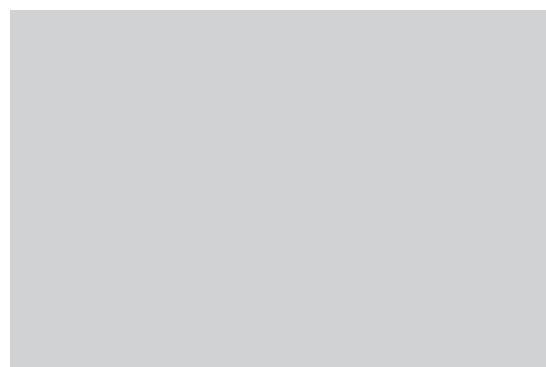
天安門広場の歴史博物館も見逃せない。ここは中国人民大衆の社会教育の場所であり、実物を見せて歴史教育をするという目的のもとに造られた大博物館である。特別企画の展覧会と本来の歴史的、時代別の展示とで、うまく中国の歩みが理解出来るような陳列をしている。あらゆる歴史資料が全国から集められて系統的に展示されているのである。中国の博物館は最近大巾に進歩しており、日本の博物館が美術博物館とするならば、中国は歴史、資料博物館といわれるもので、美術品と考古遺品が密接な関係で陳列されている。また、文化大革命後、いわゆるヨーロッパやソ連式にケースの中に一杯積み上げるような陳列方式から、物本位、作品本位の理解しやすい陳列にかわりつつある。しかもここに陳列されている陶磁器はすべて選りぬきの魅力ある作品で占められている。

山西省は陶磁史の要地であるが、日本の研究者が訪れた事例は意外に少ない。私は一昨年山西省を訪れる機会にめぐまれた。山西省の省都太原には水既生先生がおられる。書道の大家であり、すぐれた文人でもある。そしてこの伝統工芸研究所の長でもある。この研究所は山西省全体の陶磁器の研究もやっており、山西省の各窯跡から大量に発掘された破片が整理されている。定窯系の質の良い白磁、磁州窯系の鉄絵や宋赤絵、鈞窯系の青磁類など興味深いものが多い。今まで予想もしなかった陶片の山にかこまれて興奮した。その内で私は鈞窯系の青磁に特に関心を持ち、また日本人好みの宋赤

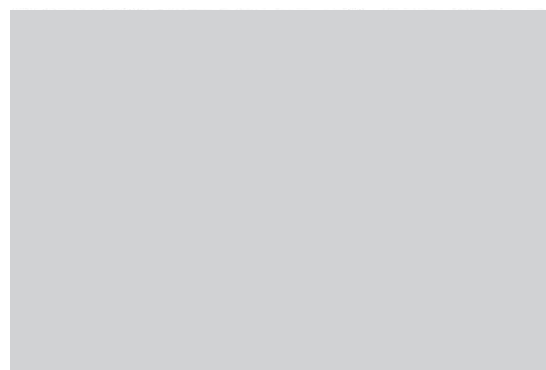
絵の破片に魅せられた。宋赤絵の盃と人形の破片である。人形は唇が赤、髪や目が黒いもので、従来は明時代の玩具として軽くかたづけられて来ているが、やはりこれらは共に金代のものと見るべきで、当時の民俗資料として再考されねばならぬ重要なものだと思う。ここ山西では水既生先生のおかげで大変な勉強ができた。

また、去年、私は奈良国立博物館の館長を団長とした博物館の方達と仏教美術の研究旅行で敦煌を訪れた。敦煌は仏教美術の宝庫であるが、古い文物を非常に大切にすることから、普通個々の洞窟には扉をつけ鍵がかけられている。比較的価値の低い洞窟が若干公開されているのみである。しかし、今回は北京の歴史博物館の招待ということで、ほとんどすべての洞窟を見ることが出来た。その日程の最後の日、五代から宋時代の洞窟を見たのであるが、その第六十一窟に非常に興味ある壁画をみた(挿図4・5)。それは山西省の五台山が広く画面に展開しているもので、大小多くの堂塔伽藍の他に山影や露天に珍らしく大きな壺形のものも点在している。ほとんど総てが黒色の壺形で、その壺形の中では坐禅の僧を画いたものがある。よく見ると壺形にはアーチ形の出入口がくりぬいてあり、そこから僧が出入できるようになっていた。また、黒色の壺形ばかりでなく、たまに黄色に縦縞のはいつたものもある。最後の日でもあり、係官も忙しそうにしているのてくわしい質問はしなかったのであるが、中国ではこれを壺と解釈はしていないようであった。帰国後、壁画の図録を見、その解説を読むと各所に「草廬、草庵」を設けてそれぞれ一人の僧が苦行の坐禅をおこなっている、というもので、陶磁器の壺とは書いていない。しかし、黒いものも黄色のものも草廬、草庵というものではけっしてない。丹念にみるとまさしく壺であり、

壺の側面にアーチ形の出入口をくり抜いたものである。ただ底部がどのようなになっているのか、壺としては少し裾拡がりになっているのが気にかかる。草廬と簡単に断言出来るものではない。これは早急に解明しなければならぬ問題であるとは思っているが、いまだその機会を逸している。ある禅僧にこの事を話すと、五台山にそのようなものがある事は初耳だという。ただ五代時代にこのような大きな壺が僧の坐禅のために使われていたとすれば、これには何か深い意味があるのであろう。禅宗の方の言葉に「壺中天あり」というものはある。またこれらは古い道教の言葉「壺中天」にも何らかの関係があると思われるが更に調べる必要がある。また、別に55窟には宋代の画筆による観音経変海船遇悪鬼の場面、即ち海船出航の画面がある(挿図6)。この海船の中央に黒い壺形が大きく描かれており、その周囲に合掌する旅人達が描かれている。その解説にもこの



挿図4 敦煌莫高窟第61窟 五台山図部分 五代



挿図5 敦煌莫高窟第61窟 五台山図部分 五代



挿図6 敦煌莫高窟第55窟 普門品変相部分 宋

黒い壺形は「草廬」と書かれている。しかし、単に舟で壺を運んでいるのではない。岸边には地獄の悪鬼共がその舟にむかって躍り狂い、何か投げつけている様子である。海を渡るのを邪魔しているであろう。思い過ごしかもしれないが、坐禅を組んで、そのまま往生する、壺中の即身成仏とし、これを南海の補陀落に運ぶ船旅と見れないだろうか。更に五台山図の場面には既の図があり、その前庭にこの黒壺がおかれ、その外側に立派な車が止まっている。その壺の表面は黒いが入口のアーチ形は白く塗られている。白壁で封じているようにも見える。また別に既の場面で同様の壺形があり、この中に横臥する男一人を描いたものもある。これらは何らかの経典説話によるものであろうが直ちに解決はむずかしい。山西特有の黒い壺は宋時代五台山の北方の渾源窯で焼かれており、画面の五代時代にはどうであつたかは不明ながら、五代でもこのような壺は焼かれたことは充分考えられる。私はこの画面の黒色の壺形も草廬ではなく壺であると推測しているのだがその形色など詳しくはなお考えてみたい。

以上の外、有名な江西省の景德鎮、南昌の博物館、それに湖南省長沙の唐代陶磁にも言及したいし、また各省を代表する大博物館の他に、最近、大小地方都市に各種の博物館、文化館、資料館が出来るようになってきた。これらの例も紹介する必要がある。

るのだが、与えられた紙数はすでに過ぎたのでこれで筆をおく。(口述筆記)

挿図2・3は『福建陶磁』中国上海人民美術出版社編より転載。挿図4・5・6は『中国石窟敦煌莫高窟』敦煌文物研究所編より転載。